

鬼怒川洪水を告発する-2

国はすでに耐越水堤防技術を完成させていた。

茨城の会会員の石崎勝義さんは元建設省土木研究所(以下土木研)の次長を務められていました。その石崎さんが「10数年前、私が退官するころ土木研は洪水が越流しても決壊しにくい『耐越水堤防』の技術を完成していた」と語ります。

研究は1967年の加治川水害の経験から始まり、大型の実験堤防でテストを重ね、1984年にアーマーレビー(鎧型堤防)

- ・1988年：加古川堤防に試験的に採用。
- ・1998年：国はフロンティア堤防と命名。河川整備の重点施策とする。
- ・2000年：フロンティア堤防全国展開。雲出川・信濃川・筑後川等で計13.4km実施される。

※下の図の見方

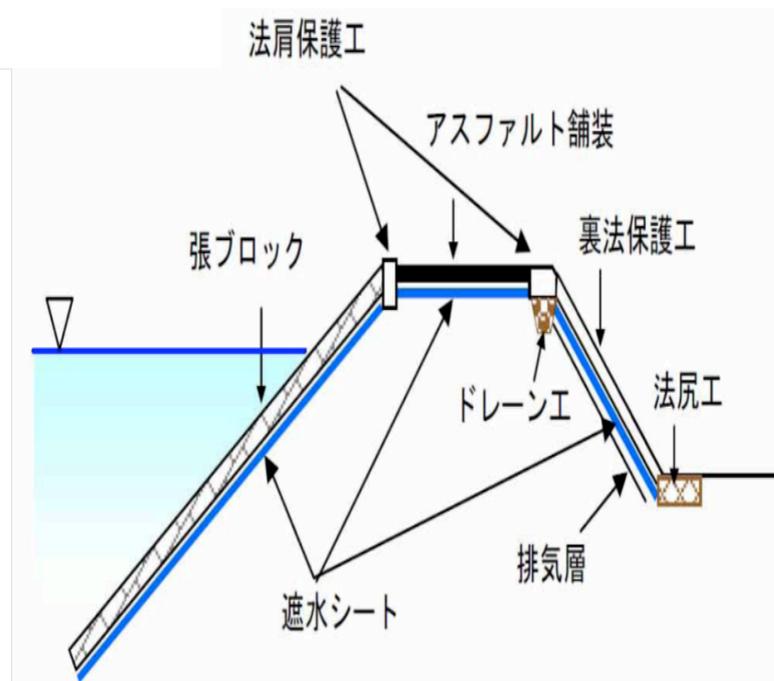
堤防の決壊には様々なパターンがありますが、多くは越水した水が堤防の上部(天端=てんば)から浸透して土を掘り崩すことと、家側の裏法面(裏のりめん)の土が洗い流され、地面とつながる最下部(法尻=のりじり)が激しく洗掘され堤体が崩壊して起きます。

ご覧のように、まず土で作られた堤防を遮水シートで全面に覆います。川側の表法面は張ブロックで強化し激流に対応します。天端はアスファルト舗装し、表裏の堤防の肩の部分法肩を保護して崩れにくくします。そして要

比較的低コストの耐越水堤防の工法

● 鎧型堤防(アーマーレビー armor levee)

雲出川の耐越水堤防(淀川流域委員会の資料より)



として最終報告書が提出されました。

その後、アーマーレビーは次のように進展します。

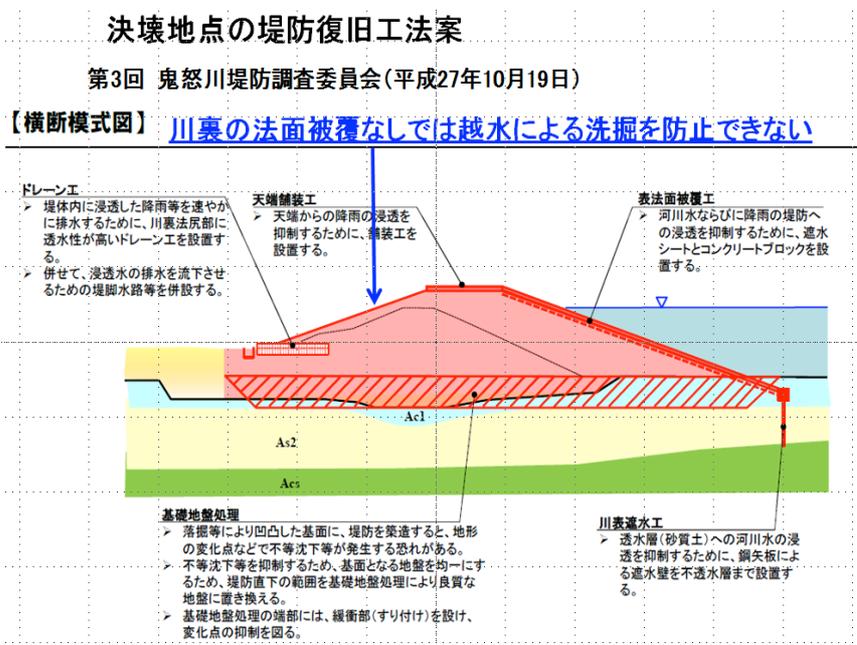
て土が流れ落ちるのを防止します。法尻には流れ落ちる越流水を排水する暗渠を設け完成です。この辺を留意して次頁をご覧ください。

## 裏法面を放置した

### 鬼怒川決壊地点の堤防復旧工法案

問題は下の図です。天端と川側の表法面は強化されますが、肝心の家側の裏法面は、これまでの“土堤”のまま。石崎さんは怒

ムは球磨川下流の八代市等を洪水から守ることが大目的でした。一方で国は、同市の萩原堤防をフロンティア堤防にすることで守れるとも言っていました。



りを込めて語ります。「越水した水が流れる裏法面に被覆工がなければ堤防は急速に侵食され天端の下まで堤体を失ってしまう。そして天端から垂直に落下するエネルギーの大きい水流が堤防を内側から破壊する。理解できない」と。

ちなみにフロンティア堤防は 1m あたり 50 万～100 万円で済むといます。復旧工法案との差は微々たるものでしょう。被害者のご苦勞、これからの街づくりを思えば、とても誠意あるものとは思えません。

### 何故消えたフロンティア堤防政策

それにしても前世紀の末までは目玉政策であった耐越水堤防＝フロンティア堤防はどうして消えたのでしょうか。

ありました。東の八ッ場、西の川辺川と言われた川辺川ダム問題の中に。川辺川ダ

2001 年、住民討論集会で住民側が情報公開請求で得た資料をもとに、フロンティア堤防があれば川辺川ダムは不要ではないかと追及。追い込まれた国は、説明パンフレットにあるフロンティア堤防を“強化堤防”に変更。

2002 年からは一切の記述を削除してしまいました。

ダムを造るためにコストが低く早くできるフロンティア堤防を切り捨てたのです。自ら開発した技術をダムのために捨てたのです。そして 2015 年 9 月、鬼怒川の悲慘が起きました。

### 茨城県も認めた

#### 湯西川ダム治水負担金と県の無作為

2 月 17 日、常総水害被害者と県当局との話し合いの場がもたれました。

席上、前 115 号で触れた茨城県の治水負担金 111 億円に相当する“著しい利益”を確認したかと問いました。答えは「していません」。仮に 111 億円を耐越水堤防に投下していたら 1m50 万円として約 20km 強化できたこととなります。県は裁判も辞さぬ覚悟で被害者の訴えに応える責任があるでしょう。

**八ッ場ダムをストップさせる茨城の会 代表：濱田篤信 船津寛**

事務局：神原禮二 〒302-0023 取手市白山 1-8-5 携帯：090-4527-7768